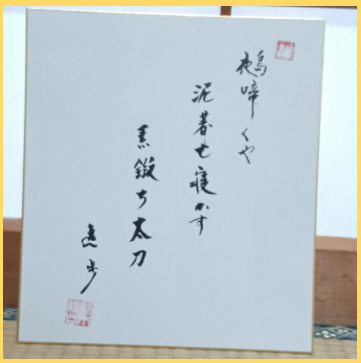
第7回

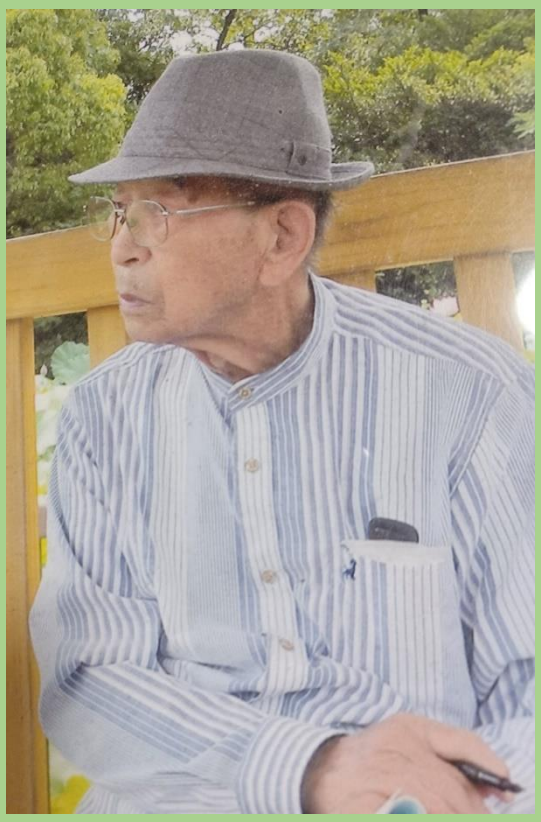
シニアライフプロジェクト

「自分らしく生きる」高齢者をご紹介！



これから年齢を重ねていく区民の皆さんに、高齢になったときの生活をイメージしていただけると幸いです。誰もが自分らしく生活を送ることができる環境づくりを目指した、南区南部いきいき支援センターの取り組みです。

100歳になっても現役の俳人で！



駒木　保さん
「俳人蓮を詠む」と友人撮影の写真

南区在住の駒木保さんは来年の3月で99歳になる。今も現役の俳人だ。

駒木さんは福島県、現在の白河市生まれ。戦時中は予科訓練生として東京に住んでいた。終戦後は地元福島に戻り村役場で働く。地元は那須高原に近く自然に恵まれているところ。地元の自然をテーマに俳句を作り始め、新聞に投稿をするようになった。駒木さんの長きにわたる俳句人生がスタートした。

26歳の頃縁があり南区の会社へ就職。仕事続けながら俳句雑誌「年輪」の編集作業に40年ほど携わるようになる。駒木さんの作品は俳句雑誌に掲載されることもあり、自身でも今までに句集を4巻発行している。次巻の発行を考えていると聞く。

「大腸がんを発症し転移して肝がんにもなった。大病を患ったが担当医がびっくりするぐらいの回復であった。この回復は俳句をしていたからだと思う」と駒木さん。これが縁となり、担当医の母親も俳句をしていたことから新たなつながりができた。

俳句が生活の中心の駒木さん。現在は一人暮らしで、お子さんたちが訪問し、生活を手伝うが基本自分のことは自分で行っている。

長女さんより話を聞く。
「私たちが小さい時も俳句ばかり詠んでいました。俳句のためにひとりででかけることが常でした。弟がいるのですが、父親が一緒に出かけることがなかったため、私が付き添いで出かけることも。弟と映画に行ったのですが、男の子が喜ぶ映画に行くなんて恥ずかしかったです。」
と思い出を話される。
奥様とふたりのお子さんたちで家庭での夫・父親としての駒木さんの役割を補完していたとも聞く。しかし、98歳の現在も元気でひとりで外出できるのも俳句のおかげだとも話される。さみしい思いも長い月日が経ち、いい思い出のよう。

駒木さんに今後の思いを聞くと、即答で俳句を続けたいとおっしゃられる。いつまでも現役を続ける駒木さんの笑顔と言葉は力強いものであった。

熱田神宮で行われる踏歌神事についての句

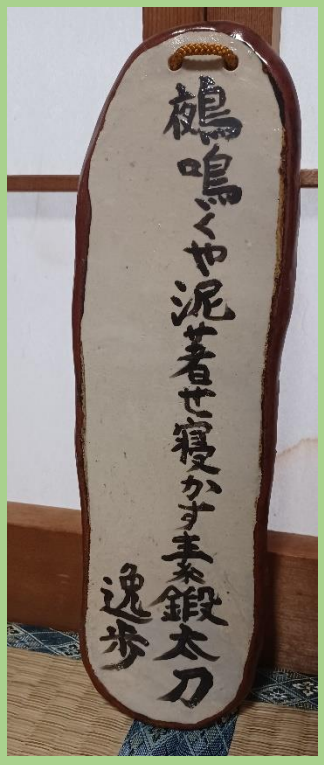
精霊（せいれい）を慎（きよ）む禹歩（うほふ）踏み踏歌（とうか）舞ふ

駒木逸歩

角川季語別俳句集成新年　掲載

駒木さんの句集

熱田神宮で行われる鍛冶奉納についての句



ぬえなくやどろきせねかすすうちたち

発行元：名古屋市南区南部いきいき支援センター
052－819－5050